古今著聞集巻第四

文学

伏犠氏は天下に王たりてはじめて文字を書契となづく
縄をむすびしるしとせしより文籍あり孔丘は
仁義礼智信をひろめしるべ道をうしなう書曰五教
不敏堅人ふぶ学ぶ不学道又云仏風寿信莫尚於文教
訓民莫善於学文学は男子の養なり
天皇十五年に百済国より博士弘賢をおくりこしまつりたりて後弘賢ふみをまなびつたえ
志のゆくすえをしるしたまふ

もろもろのいとりの長天皇第三の子大津皇子は
とつたりけるそれよりあのくに風狂月の長歌に清
明の風をよせ一詞花言葉の麻衾也を掃清はらえ載す
ばりの
天暦六年十月十八日後江相公の夢に白衣
をきたりおとこあらはれてそのうら成れば白衣
をきたるひとの西の西わたりをとりもつ者
をきたるものの沼人わいきたりおとこ平天
まつりたるひとの西をきそれぞ去りなりとぞ答のひ
とりをなやびき事のさてまわりはしのたひとるにいなざ

物語にも及びけして義さあるまじけれど旧情に筆跡あり
天暦の時綱文時に作せて文集ありと結えらび
て書きつゞさよし勅定ありければ

送蕭處士遊黔南

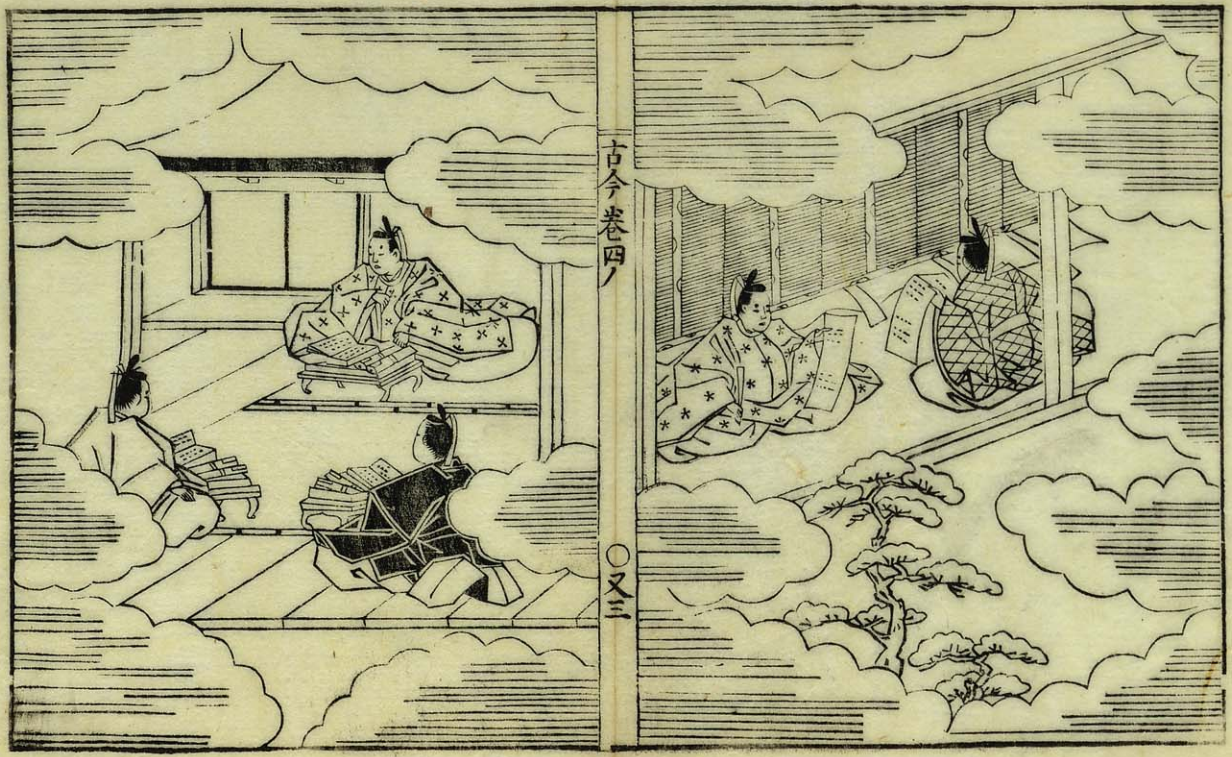
能文好飲老蕭郎　身似浮雲鬢似霜
生計拋来詩是業　家園忘却酒為郷
江從巴峡初成字　猿過巫陽始断腸
不酔黔中争得去　摩圍山月正蒼々

此の詩篇をもよみえらびあてすゝめまゐらせけり
句もどれも皆ハ作りあれど此句新しかるゆゑに

ありがたきところやある人見られねど真ある筆とぞ
或ある人紙文房ハ紙筆硯を書きをよ王子晋之昇仙後
人立祠於緱嶺月華大鶴之早世行客望残硯山
ノ雲　此の句まことにどれとりきはを深く月にはわかく
見きりよむある深く出家の人縁じられハ天祚に感
じわかりわれとられなひくはまや
蒼波路遠雲千里白霧山深鳥一声　此句ハ橘直幹
が秀句なく御のは裔抜に入ハ唐の時まで作ありさ
称しきり但雲千里と作を霞千里と直して事絶え
ある一文字を八虫一文字とかはしたりきる欲唐人にて

て俗句やく侍るをそこらに書かき置て侍るば
ようの物まーそでいひをかうのよしをいたそ
こ侍ぐをそれをたのみのすがはつれ
赤途程遠地思花唐山之夕雲後會期遥霑纓於湯
肝之曉淚と後に相ひ合ひ書こをかと流れ人感涙と
なるーをかのちかぜ殆人よわひくれおそこの侍ふ
のがれをやこのうちをこらば若それば見ぬ思
ずとりちの侍ふまいわーごりをるをでとしめをる
おもひ者竹葉ふ者ふ有て三千世界眼おそやを業じ
ふくて白髮ひとつひ侍りをふその業れ表は

兵乃天十二因縁ハ仏裏をとつをそをまひをを角んじ仏
をこ侍り
鳴渡山清こい事侍ハ言つこ海川ををる仏海雲露無日
宮見伏謂物果宮ふ物や侍ふ物ふ去ふれこら縁
まてこみのをこふをと為ハ寒ハ仏ト為ふ侍ふ侍ふこて土
象ふ侍ふ侍ハくふ侍をなるーをこふ人或ハ厳ー或ハ
きりはハ寒ハ文博ふこに表ふ物を人くふ侍ふー
ふ侍ふ侍ふ表ーはふ物ふこを
後世天ふを表ふ表ふ表ふ表ふ表ふ表ふ表ふ表ふ表ふ表ふ
ひくふ慶二年九月十三日歌宝花園法まて為ふの



ゆゑにかきるに哉りて大晦日節に月も影にまかせて扱
とらへく藤原にも月映素輝に七十杖関白殿錦をのよ秀
句なればきはむるしかふところに扱抱かず持るもの
ねすしたり年代ハ不覚のすみやくしてねすみ如くて
ふたり不覚の花中偏に覆菊桃花并楽天が書きたれハ元
韻が秀句之淵君子琴瑟篇はた歌などうらげの
中にあるものこそありていひえたる家にまるものを窮孔
あるにありてその風よろしからずし後の学ぶものあ
て盡とあるべしとさくらせよかぎり
いづれの年にか天下に流布するやうになりけるに或人乃

萬葉に文附二三家の詠のまゝ成ときは哉風是非とも
これ歌して古く沙りきりなれぎ是はいふもとく本て
ハ知らずぬ所ぞとて思ひれど滝山雲所要の歌の〇
さはうり人の歌の見めバいづれも世に云ふれまでとて
こたへきり是非ハ分るもく知りたる事もかふえたり
よりく文読しらやまぬふにして一道に於て誠に人ハむかし
も今もかうれかつぎ物く伝り大内記者流の深秘
と八雲などにおんじて下向に附す附属れ文筆なり
おそのびたるに親王合歌並衛門何者曰敵彪し士教
後殺分東葉弾論似る道猿沸く渡まし録秘お故

尚書又命云歌弟和何答曰端雪之期臨墓之上似琴
柱又命曰以言如何答曰孤遠於翠松陰下如養陵之又
命曰是下如何答曰雨上芝郊如毛車時く似之法声と
やをかいと異わるとやをかるとの自漢の魏文帝と張と
しと文選中に侍れ白氏の作をハ来世をまつるあ
けるとやをれバ和漢風情相ほとんどひく聞ま侍
やうふ侍ども皮保能が詞古今序ハ[illegible]
非いづれもまるまるとしてをれ一隅を傳もて若
[illegible]

古今巻四　〇六

白河院御対の襖ぶりに医師坊ゝすきをふ侍ら
ゝまつるさうゝ法ゝをゝ侍よ春下に義忠ものそつく
ものしるふなりあをり忠孫ゝ医房ゝ花ゝ侍小双典
雅楽風地く波扁鵲懐入蘭麝之香ゝこの白ゝ意象
白ゝくゝの人ゝめくゝ侍りをり
江中納言匡房承徳二年紅梅小住ゝくゝりをふ
同康和二年ゝ初春梅迎ゝまゝくゝ出ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ八月廿日撃花を津ゝ侍ゝ
文殊の山寺成ゝ地ゝ治安の初春雅憲ゝ
ゝ侍ゝ一伽藍ゝ侍ゝ

同序云社稷之長改化雖高朝闕万機未必充娥雀
風月之主多名雖富夜臺掩未必類祖宗彼爾兼
暮雨花尽巫女之嫋々秋風人下仙子之廟古今相隔
幽冥推同匡房五稔之秩已備待春酌醪于江湖舟傍
觀之期難知何日復列廟門之籍と申さるゝ事なれば
いとく蒙光雲雨如吾否其奈那波北帝京をもん後
きてうし序城綱一を序付その中に勾城山のうゝ人
の孫なるこの時の之々波ハうゝひとく神感れあり
天神御孫にあるふこそと人くゝを序今年新宮祝
満のさにあうきて明主波治さんを序る城神を落り

おほく見物しける偈にてあきたる同じ年新増をそへて花
洛にあそびしとて其の日の事にありしく序は尺の紫の奏して
中に人あまた昔を序ハ此序は中にあやまりあるなり後に
也ましと見しくさめねたる後併の序は沈思さはる人静か
中之景絶暮花前之飲歓罷と云句ありけり静中ハ
秋の半之夜の時よりかばと見疑して例の義されはき同序
に潘江陸海雲之文章也暗巴字之水洛妃漢女而
悲夢也　自動魏年之塵荒廟甚春竹深一掬之涙
徐君墓古秋懸三尺之霜右軍既酔蘭臺之席梢巻
左縁頻顧桃浦之花欲ぬが如し丸表句は心中出され

かりかへしよみける席の輩めでさわぎあはれがりて講ぜず
深く時の文人ありて例の序は御文の府佐保なり人
も御らんぜられたりけるにその序雷にひとしかりけり
まかりける比承和二年又新嘗になりけりまかりて礼拝
引に過ぎて則を得ざりけるにて
尚歯会は唐の会昌五年三月廿四日白楽天履道坊にて
て始めて行はれけるなり我朝には貞観十九年三
月十八日大納言年名小野山荘にしてはじめておこなはれ
けり其の後安和二年三月十三日大納言在衡粟田山
庄にてぞおこなはれける其後天承元年三月廿二日大納言

宋史に白河山居ありく後行きて七更年三吉為康
年八十三　前左傳に依て春秋後七十六　前の日向守中原
廣俊七十　帝王七十　或は大補為家教光卿七十九　右大弁
実光　辛　或は補為家時登　辛　しかるに基俊は病よ
りて後をとりて時登序成ば辛　うきを
埴下小中納言師時卜行きて詩歌絲竹おのおの朋徐
お後乗天三年の句後をつくりて文武
は大補で徐多又岩風倫カ　句遊賢高山　句
弊射芸の句お毒に徐でもそよ遊興くへきて青
ハ比名ありく盃杯をて歌ハ行をつて或ハ義信を

命じて詩まで花戯しを序今　をあうれるを
後を行ぬるにをしさうれ
永久三年七月又有或の左補左記朝臣は侍従を
はあへ参りて序よ光朝徐をしきる事遊兼
化遷元弥をく辛大大公を遇関文の句こ沢古来後くう
よをりはりの感をびとりつるの形ゆよ義信ありかう
皇上御留とふ世のの文閑て左記朝臣あはけるの
義人朝隆朽烏ひて左ろを中こ義信
勅学徐の学生あれおりて須高志をるひ行のく
儀しを序年盛衰次をいくびれれ仏弁小産ま

着題しを定めかきり給ふ代に陸機のことハてつきハてかきり侍る
なき事くハいはんやそこはかとなきに陸機か文選
三十巻四十巻の切韻暗誦のものあへハとふるる陸機めく
なほもこのひとかたに優なる先達に渡守なあつくるものの
きりは陸機の秀才ハ人のうき事ひきかへ又弘の例にて
後人よりけくやまされたつゆよりまハけりかきりや文に對
菱暦 御写本 掃子老自進湯之一光取明綫見費皆
白高山之四皓しまさるものくはなしもあるかと
人にはおかうりのかり
康治二年甲子ふわたりかきり例よまうせて学令

れさせ給ふへかりけるを宇治左府并に閣太府なとにおほせ
られけれは閣思殊さにかたりけれはいでんにしてかしこまり申
ありけれはとて其たくしてかたを見ぬへき由に申さる
給くかうもいまの人のかうものをまなふ事悉皆のひ
作文事ハ文永中以後のおかはしめもいはん程にして
おかしき事ハはかり字よ承久あとし論語ハ年ふく
学はかたとしそれよりきりかりしも論語ハかりわ
まさとて二年十二月七日安倍泰親をめし河原
ふく泰山府君をまつらせてこれをのりし宗廟ふむ
りせなひきりの勅社ふそのうかし故のつきに宗みり

〇作ぞ筆しけるを御覧じてのち　おぼしけるは其定におぞか
せられける文たてまつりて冥加と思ひ給ひてかへせ
させまゐらせ給ひ御座さしつる事也
仁平元年宋朝商客劉文冲東坡先生指掌図二帖
五代記十帖唐書九帖名籍をそへて宇治左府に
まゐりすゝめし文章博士茂明朝臣して前宇治殿
左衛門尉宗信ぞ清書書たりけるを御覧じて尾張守親隆が筆也
おほくありけるを御覧じ今は無双なりと有りけり　その文を書
周易をたてまつりし　その前寄三年よ周易疏といひ
ける名籍を宇治殿よりつかはさるゝ也ける

これは書状にてつかはされけり
仁平三年五月廿一日院宣によりて宇治左府東三条
にて学問料の試をおこなはれけり藤原敦綱藤原敦登
宗成蔵清藤原敦經光範菅原長義十五人の経
にまうしきこえたり或ハ左備前紀範[illegible]
卜或ハ作文清書を読めしく左傳禮記毛詩をうけ
ひく説をえ　いづれもこれ断切にうけしく
郎下をめしくゝて　ふさせ給ふの礼以後と[illegible]
とさせる家司幽葉坂にて試衆にこれを
出させくだされてものゝ給ひを度傳定之ありける

後水尾院より通憲入道をもおほせられ
しそつのゆゑ光孝院登宣で給ふ
偽元二年四月廿八日義人卿よりて亜槐の式ありけり
中宮亮師亜師尚朽のく屏風とりてゑ入れ
絵師朝長義人なの弁雅朝義人動解由次官歌絵
のつきてうせり雲上殿上絵師下毛侍尚高高倍絵
れ中よ十の夏頃ゑ入いでてまりうりゑ絵
ゑり師亜八三年ゑ通一宣憲師尚八二すゑ通一
ゑりうり師月歌絵師をゑく助成師光尚牛業
亜槐康春ゑ法義人ゑよりく評定きれうり師亜

倍宰ゑをれうにうりて音百つゑゑねうり
お納ゑ入ゑ仕ゑゑゑよりて人ゑゑりてゑそび義よ
歌絵倍義絵ゑ部ゑく出産の絵絵仕ゑ産ゑ産人
ゑ仕いゑ入ゑゑよ歌用ゑ下第一ゑねゑ一ゑ
ゑく義人ゑれゑ絵ゑ無ゑゑでゑり仕ゑうにゑ
絵ゑれゑ有家ゑ産のゑ人ゑよゑゑうゑゑ入ゑ納絵ゑ
ゑ一産ゑゑれて才一産二絵ゑゑゑゑ絵ゑ絵ゑ
ゑりゑん月ゑよゑ部ゑよりゑゑうゑゑゑゑや歌用ゑ
ゑゑて仕りゑゑゑうゑゑ撥れゑ絵ゑ三曲ゑ愛ゑ
家ゑ産ゑ声ゑゑゑうゑゑ絵ゑの無ゑゑく人ゑ感歌

しけり後朝臣のおもひいでしお遊ありけるにや
治承弐年八月晦日内裏にて密々に作文ありけり
詩境多緒なる勝趣成絶にて下の句をとりて題に
たる小臣忌一字探金韻可聴白楽天作くはへて也けり
これは永く内にて永久の比にも後拾遺にとりまた詩を給
ひてそのけ事が感涙をのごひく各人墨客の南殿へ
おりて二條左大弁藤原しきりにたゞ感じ申されけるとぞ
ときうけ候へばおどろき申しき雨間にて
ここに金蓮の風月は法文にあひてとりおこなはるゝ治承弐
年六月十七日延久のためしをひかれて申されし

又あくる朝すなはち花太政大臣 左大将 中の文章 博士
後中納言資実 権中納言実綱 宰相中将 実宗 式部大輔 永
範 左大弁 後藤 中将雅長朝臣 通親朝臣 権右中弁 親宗
朝臣 蔵人左少弁 兼光 蔵人勘解由次官基親 蔵人左衛
佐藤原実綱卿めされたり式部大輔永範のまへにおきて
て禁中遊宴勝概と云ふ題をたまはりて御盃をもてまゐれば
御杯をとりめして太政大臣雲客らに詩をすゝめ給ひける
をきゝて深しくおぼえけるにとぞしもひとゝせに
きこしめしてや中の文章博士にて御前にて
なりしわざとくさうしめくしてかえて文の(?)詩を

云てつかうまつりける中御門中納言宗家卿拍子ハ
十於六角宰相家通卿篳篥ハ中納言定能卿篳
篥也さく雅賢朝臣和琴をひきし同じ朝臣
宗賢鳥代被席因契取志深伴侶[illegible]東宮
此程にて詠歌にうつ光琴[illegible]く[illegible]れ[illegible]の
時に大江匡房此製をとりて文[illegible]のよくよひかれ
されども[illegible]大浦ぞ[illegible]じ[illegible]りを[illegible]

樓遠迢月下猶[illegible]之聲ニ[illegible]之頂声
寒席聴追延久[illegible]詞花於異[illegible]風情

發句下七字中[illegible]大夫の[illegible]よあひく[illegible]れハ[illegible]

於ころさ[illegible]ぐ歌しき[illegible]の人く感じまうどぞ[illegible]
此製をとりて懐中より今ひとり延久[illegible]土御門右府
八百も経ハざりを[illegible]よいて異ありさぞのありを
[illegible]及ひつり[illegible]ひく後数文字[illegible]ひ[illegible]に
ろよく大[illegible]半ぞあ[illegible]れくめでくぞ[illegible]
[illegible]大[illegible]赤も因縁しかりと後今月徳[illegible]
[illegible]縁しかきりか[illegible]不此製よ[illegible]りあくせ[illegible]
人物縁と[illegible]る[illegible]式[illegible]大浦よ[illegible]へ[illegible]れども
紀納言[illegible]あし年月さどりかりくそ大夫判[illegible]
[illegible]かしてかま[illegible]られつりそろゆく[illegible]ぞ[illegible]の[illegible]

の文人目を喜ばしめられ所に右大兵部卿方にて
きる事人々あやしみあへりひかるゝ小さかつぶ
るゝ右大兵部卿殺して帰て後大兵部卿
と稱ヤ殺り賣よ人屋まうをあや天氣ふ使りり
事ありとぞ
文源三年九月七日曉寒月出官の長巻を持て中兵
定長卿下小殿をうかゝ臨時作文をおこなはれて
ぞり為長のうし城の帝よ巻をれ出ぞ殺ろ人
く殺まして同十月六日作文ばをこなひ殺ろ弧
八廣遠筆月出源中納言通親ひとこ書れ殺ろ序ハ

大内記藤原朝綱ぬの殺ろ序ハ為光に
或の大臣光能朝臣大学頭正義卿下文章博士宗綱朝
臣ふ朗詠殺ろ殺ろ此作余執筆ろ殺ろ
もかくあるのあけせかりまたりのあるく作り
或人曰百詩とは長恨歌琵琶行とぞ
いひ殺ろ歌曲ぞ殺ろ殺ろ殺ろ殺ろ
又白氏殺ひ殺ろ殺ろ殺ろ殺ろ
松の年ぞいひ殺ろ殺ろ殺ろ殺ろ
そ殺の事後ハ連句ぞ上ぞ殺ろ殺ろ

春調春雪晴　古関右馬頭

踟躕 駐牧馬　戰戰 習家狼

あまりとも思ふ後ゞ秀句ども作る

邑上帝うれしを語ひく後枇杷大納言延之はあるを浦山

思しくおぼしまてはくみれいろと生ぬぎ給へさりそう

ある夜の夢ふ出製とあるひ多

月梅日本雑胴別温泉清涼菊亟城

軍率寂寥後内侍如今於彼猪卿名

大納言義さあてたろうさて足ふ小しあてまりる

無拝賀新一寝程恩言芳慶奉汗情

義中　如覓義中夏雑盡一　生覆宇鑑

後三条院東宮ましまして おりし御ものの時分の士実政朝臣

伺ふ よりしきを御よ餞別れ ごりて 侍りませ給

て出製かりをあるとも

列民振作耳棠孫　莫忘多年風月遊

けんへも結ん孔子曰耳棠莫伐部伯之所茂とあ

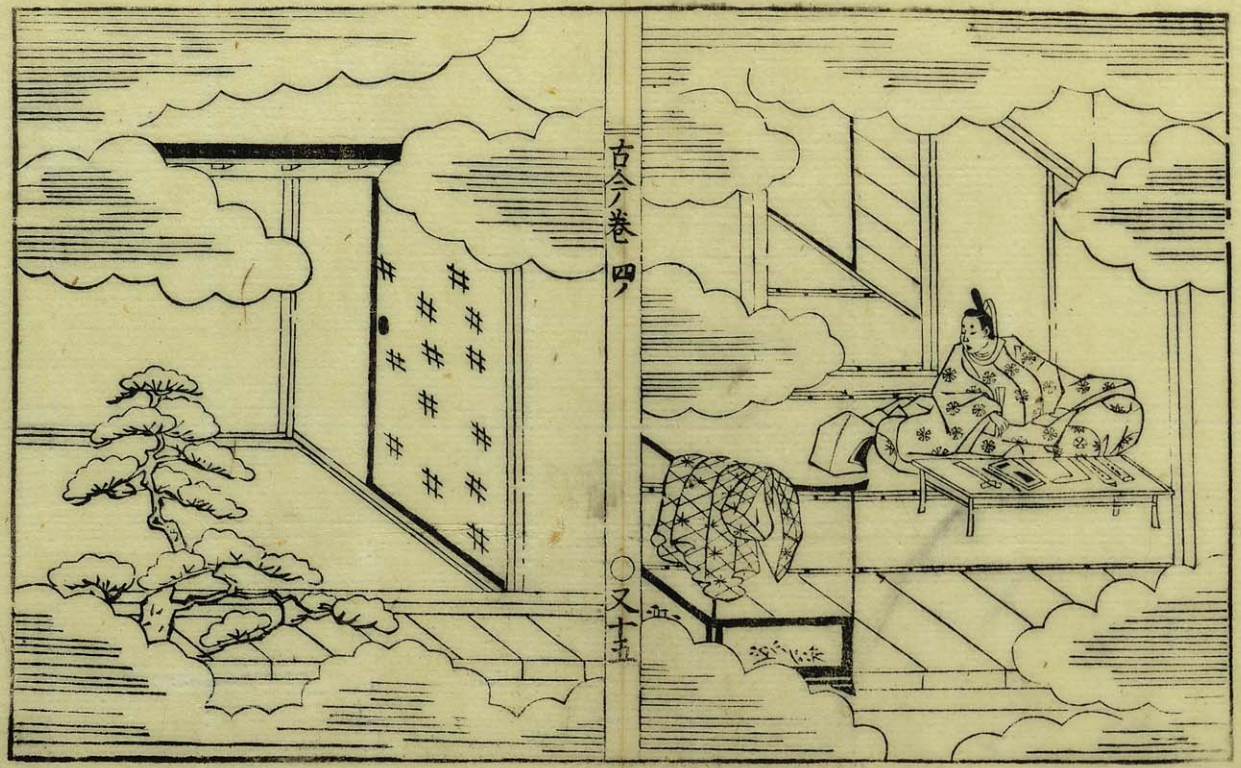
る事ゝ

中納言敦基へハ法一条院とゝめ給ひ くまくも

つくさてあふつきてうゝみかりをれ門よれ

ありきれで先ハ二君よ法ゝ師やいひく天台横

巖後りのがりくからあるてぞれ門のこれまひ



[illegible]

古墓何世人　不知姓与名
化為路邊土　年々春草生

菅原相昌春三年九月十日寄小四三位の石大臣の大
殿にて内ゆりせられたりとぞ

右富春秋長淵光　恩景渥岸報揚[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

去年今歩[illegible]　秋思結篇独銜腸
恩賜御衣今在此　捧持毎月[illegible]香

後に相公の澄明ふかられくのら[illegible]

を感ずる文か

悲之亦悲莫悲於老後子

恨而更恨莫恨於少先親

さりけるこそおぼえなかりしかとさうがいくわそれよりおもへ

攝西通ゞ卿ゟ被ㇾ申ㇾ恨ㇾ哭ㇾ涙ㇾ之ㇾ事ㇾ

院参ㇾ具平親王家の作文序者うをおくよ元盛法

しやかりひさん

黔亞顏駟ゟ三代而猶沉恨同泊響歌

又嘆而欲ㇾ去ㇾ之ㇾ ひさを感涙為憲を産ふ作ㇾ

ひさ成わやゝこそ西通ゟ申ふこころをそ　ほくうこの卿ゟ

ゆやとゝをれどさんの四ゞぞくやゝ人ん涙をなげかろ

さて為ゟるまに宮殿へぞ申よを感世成ゟ申ひさくひ

まふくこそんさまろゝめといとくわれなりかこ

ゆく宰相よりをうれをりをそ後ゟゆへきる赤三条院

實白前太政大臣九月十二日の月小赤小流の金仏よ

ゟ申ゟ小ゟ物をうゟ申ひく世の中をゟ川ん

無信成ゟ人ゟとめゝゝあゟひゟでゟあいゟでゟやゟん朋誠

ゟ申ゟんやゝ作ゟ書をゟれゟだいゟゝかゝこゟ通ゟて　ゟ

ゟ申ゟゝゟ成人ゟくみゟとをゟだゟをゟくいゟ成白成ゟ涙

ぞうんと称する楽の名歌舞会などを一番とうち
いでうりをかうこうひすくめてこかりをうしろ白うき
こを歌舞伝やがて仏はさうひろう我白髪をさぞ
うれ人の頭ふせられうをかいづりあろうれ中
の白じかりをん
白川八勅子舎の時撰舎山桜賦を歌序なり
余楽乗之為一夜山月世界
先有曲之舎三鄭河花歌舞
あれハ三月十五夜のうち九月十三夜ぞうれろ
いろいろとなり四位舎佛の愛だうりにぞうれろ

古人の所作作而可伝
天暦御時橘直幹が長歌大補と命ずを歌ヤ文章を八能
ゆく中世乃原小路出せきをうり御門敷覆わりきれ
俗人而異事雖似偏頗代矣而授官職
慰運命なりで迷惑の河を渡るくせうにうりて世第久悪の
アをうう人を地獄ぬ落わるを後内裏焼亡まで俄小中院へ
御幸せを給をうに代くれたりうの世俗子時尚書郎給
藤ヤ下を八条ると出説して直幹グア文八名ぬ
ぬ伝ぬ二名時の人いづれ半ぬぞヤを歌
古今著聞集巻之四終